

第三章 後宮の物語 帝の御前の絵合せ

[第一段 帝の御前の絵合せの企画]

大臣参り給ひて(おとどまありたまひて、やがて内大臣が中宮の絵合せに列席なさり)、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへども、をかしく思して(このように女房たちが言い争う主張の数々を面白がって)、「同じくは、御前にて(おまえにて、帝の御前にて)、この勝負定めむ(このかちまけさだめん)」と、のたまひなりぬ(仰るまでになりました)。

かかることもやと、かねて思しければ、中にもことなるは(特に重要な物は)選り止め給へるに(えりとどめたまへるに、御所への持込を選び残していらっしゃったが)、かの「須磨」「明石」の二巻(ふたまき)は、思すところありて(今回は思う所があつて)、取り交ぜさせたまへり(絵合せのために取り混ぜさせなさいました)。

中納言も、その御心劣らず(そのみこころおとらず、内大臣に劣らず勝負に燃えていました)。このころの世には(最近の宮中では)、ただかくおもしろき紙絵を(かみゑ、屏風絵や襖絵ではない紙に描いてある絵を)ととのふることを(揃え集める事を)、天の下営みたり(あめのしたいとなみたり、国家行事としていました)。

「今あらため描かむことは(今から新しい絵を描いたのでは)、本意なきことなり(競技用の画になってしまつて画本来の感じた事を表現するという意味を損なう)。ただありけむ限りをこそ(既に在る絵だけで競い合おう)」とのたまへど(と大臣は仰いましたが)、

中納言は人にも見せで(中納言は人目を避けて)、*わりなき窓を開けて(非公式の部屋を設けて)、描かせたまひけるを(画師に競技用の新しい絵を描かせなされたので)、*「わりなき窓を開けて」の言い回しについては、注に<当時の諺か。秘密の部屋を用意しての意。>とある。

院にも(朱雀院に於かれても)、かかること聞かせたまひて(御前絵合せの開催を御聞きになつて)、梅壺に御絵ども*奉らせ賜へり(梅壺女御に目ぼしい御画の数点を御献上あそばさいました)。*注に<「たてまつら」謙譲の意を含む動詞。「せ」尊敬の助動詞。「たまへ」尊敬の補助動詞。「り」完了の助動詞。朱雀院が梅壺女御に御献上あそばした。>とある。

年の内の節会どものおもしろく興あるを(年間の月次行事の面白く興味ある様を)、昔の上手どものとりどりに描けるに(昔の名人たちが思い思いに描いた絵に)、*延喜の御手づから事の心書かせ賜へるに(えんぎのおんてづからことのこころかかせたまへるに、醍醐天皇の御自筆で詞書を御寄せになったものや)、*「延喜(えんぎ)」は<平安前期、醍醐天皇の時の年号。901年7月15日~923年閏4月11日。>と大辞泉にある。唐が内乱で崩壊に向かう(唐滅亡907年)情勢下で、平安朝廷では漢学者の菅原道真を太宰府に左遷し、藤原時平の下で国風文化確立の気運を急いだ時代だったのであろう。それでも時平は道真の弟子であった紀長谷雄(きのはせを)を重用して政務に当たり、紀貫之らに「古今和歌集」を選進させるという、実務は漢学者頼みとならざるを得ない変革最初期だった。「竹取物語」と「伊勢物語」の成立もこの時代とされ、これらの

物語絵が中宮御前の絵合せで光君側から持ち出されたという設定には、王家の宿命ともいうべき作者の明確な意図が表れているのだろう。

またわが御世の事も描かせたまへる巻に(また朱雀院御自身が帝位で在られた御所の様子を絵師に書かせなされた巻物には)、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやう詳しく仰せられて(絵柄の細部まで御指示なされて)、*公茂が仕うまつれるが(公茂が筆を取り申し上げたもので)、いとみじきをたてまつらせたまへり(大変に厳粛な画を御献上あそばささいました)。*「公茂(きんもち)」は、朱雀帝代に想定年代で合致する宮中画所(えどころ)の画師であった巨勢公茂(こせのきんもち)とされる、ということらしい。

艶に透きたる沈の箱に(えんにすきたるぢんのはこに、優美な透かし彫りのある沈木製の箱に)、同じき心葉のさまなど(同じ透かし彫りの飾り花を添えた趣向は)、いと今めかし(とても斬新です)。御消息はただ言葉にて(御挨拶は御手紙でなくただ使者の口上にて)、院の殿上に侍ふ(あんのてんじゃうにさぶらふ、院の側近として仕える)左近中将を御使にてあり(さこんのちゅうじゃうをおんつかひにてあり、左近中将が相務め述べました)。

かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに(かのだいごくでんのみこしよせたるところのかうがうしきに、そしてあの大極殿で別れの櫛を授けた様子を描いた厳粛な画に)、

「身こそかく 注連の外なれ そのかみの 心のうちを 忘れしもせず」(和歌 17 - 8)

「身こそ今では外なれど、心の内は変わらない」(意識 17 - 8)

*注に<朱雀院から齋宮女御への贈歌。「そのかみ」に「神」を掛ける。「注連(しめ)」は「神」の縁語。「注連の外(しめのほか)」は内裏を離れた院の御所にいる意。「そのかみ」は齋宮であった当時をさす。>とある。また、「心のうち」に<内心>と<内裏>を掛けていて、前項の「身-外」と後項の「心-内」との対比を筋立てている。ただ構成が堅すぎて、情緒の含みに掛ける嫌いもあるが、それこそが大極殿の神々しさなのかも知れない。

とのみあり(という歌だけが添えられていました)。

聞こえたまはざらむも(梅壺女御は御返歌申し上げなさらずには)、いとかたじけなければ(大変恐れ多いので)、苦しう思しながら(院の御心に応え申し上げられない我が身を辛く御思いになりながら)、昔の御簪の端を些か折りて(むかしのおんかんざしのはしをいささかをりて、かの日の別れの櫛の齒を少し折って)、

「しめのうちは昔にあらぬ心地して、神代のことも今ぞ恋しき」(和歌 17 - 9)

「身こそ今でも内なれど、変わらぬ外が懐かしい」(意識 17 - 9)

*注に<齋宮女御の返歌。院の「注連」「そのかみ」同様に「注連」「昔」「神代」の語句を用いて、「忘れしもせず」に対して「今ぞ恋しき」と、自分も同じ気持ちであることをいう。>とある。

とて(と御返歌して)、縹の唐の紙に包みて参らせ給ふ(はなだのからのかみにつつみてまゐらせたまふ、青い唐紙に包んで院に御届けさせ申しなさいます)。御使の禄など、いとなまめかし(御使者への褒美はとても優美な反物でした)。

院の帝(みんなのみかど、退位なさった院が)御覧ずるに(梅壺の御返歌を御覧になって)、限りなくあはれと思すにぞ(この上なく前齋宮を愛しく御思いになっては)、ありし世を取り返さまほしく思ほしける(帝位に返り就きたいと御思いになりました)。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむかし(前齋宮の入内を勧めた光君までも恨み申しなされたようです)。過ぎにし方の御報いにやありけむ(かつて冷遇した御報いでもあったのでしょうか)。

院の御絵は、*後の宮(きさいのみや、院の母后)より伝はりて(を通じて)、あの女御の御方にも多く参るべし(弘徽殿女御方にも多く御届けなされたことでしょう)。尚侍の君も(ないしのかんのきみも)、かやうの御好ましさは人にすぐれて(こうした画の御趣味においては人一倍優れていらして)、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ(情緒豊かな名品を揃えて姪のために集めなさいます)。*注に<朱雀院の母弘徽殿太后からその妹の四君の夫権中納言の娘弘徽殿女御へ。弘徽殿太后と弘徽殿女御は伯母と姪、という関係。>とある。今の弘徽殿女御から見て、院の母后は母方の大伯母であり、尚侍の君は小叔母になる。

[第二段 三月二十日過ぎ、帝の御前の絵合せ]

*その日と定めて(帝御前での絵合せをこの日と決めて)、にはかなるやうなれど(急拵えの様ではあったが)、をかしきさまにはかなうしなして(対決の場を清涼殿の帝の昼御座近くに簡単に設けて)、左右の御絵ども(ひだりみぎのおんゑども、左方梅壺陣営からと右方弘徽殿陣営からとで数々の画を)参らせたまふ(運び込み申し上げなさいました)。*注に<帝御前における絵合せを三月二十日過ぎに決定。>とある。後述の絵合せが終わった朝の記事に「二十日あまりの月さし出でて」とあることから、この日付が分かる。が、この文頭に作者が日付を明示しない意味は分からない。

*女房のさぶらひに御座よそはせて(台盤所の西向きに玉座を仕度して)、*北南方々別れてさぶらふ(左方女房と右方女房はそれぞれ北と南に別れて控えます)。殿上人は、後涼殿の簀子に、おのおの心寄せつつさぶらふ(思い思いに内大臣側と権中納言側に味方して控えます)。*注に<台盤所に帝の玉座を設ける。>とある。清涼殿の間取りは tukineko.pekori.jp/heian/dairizu/seiryuu.html のサイトに詳しい。清涼殿は東面なので昼御座(ひるおまし)の西隣の廂間である台盤所(だいばんどころ)は裏に当たる。台盤所は食卓で台盤所は台所だが、清涼殿の台盤所は女房の詰所の名称。台盤所の北隣に朝餉間(あさがれひのま)がある。後涼殿の簀子は朝餉の壺庭と台盤所の壺庭を挟んだ先の西奥向こう縁側となる。*帝が西向きに御座すので左が南で右が北になりそうだが、後で中宮入道が北隣の朝餉間で見物なさると語られるので、梅壺陣営が北側を占めたのかもしれない。梅壺の実質での後見は光君だが、表向きの入内推挙者は中宮であり、中宮の周りに弘徽殿陣営の女房が座するのは収まりが悪そうだ。

左は、*紫檀の箱に*蘇芳の花足(したんのはこにすはうのけそく)、*敷物には紫地の唐の錦(しきものにはむらさきちのからのにしき)、*打敷は葡萄染の唐の綺なり(うちしきはえびぞめのからのきなり)。*「紫檀(シタン)」は巻物の軸にも使われていたが、ローズ・ウッドのこと、とある。エレキ・ギ

ターの指盤によく用いられると聞いて、だいぶ身近に感じられる。確かに赤紫の堅い木だ。*「花足(けそく)」は飾り脚の付いた供え台。「蘇芳(すほう)」は木材でもあるが、弾性が強いらしく弓などに用いられるとあり、台に使うとすれば染料としてなのだろう。代表的な色名で紫檀と同系の赤紫、との事。*「敷物(しきもの)」は花足の下に敷く布で、それが多色織物の唐錦なので紫の縦糸に横糸の浮かし織りで刺繍のように文様を施してあったらしい。*「打敷(うちしき)」は花足の上に掛けて、箱の下に敷く中敷きで、それが葡萄染(えびぞめ、縦糸が赤で横糸が紫の織物)で撚りの少ない光沢のある絹糸のサテンだったようだ。とにかく左方は赤紫で統一されていた、らしい。

童六人(わらはろくにん、運び役の女兒六人は)、赤色に桜襲の*汗衫(あかいろにさくらがさねのかざみ)、*裃は紅に藤襲の織物なり(あこめはくれなゐにふじがさねのおりものなり)。姿、用意など、なべてならず見ゆ(着付も所作の練習も念入りと見受けられます)。*「汗衫(かざみ)」は諸説あるが、概ね貴族童女の殿上正装の薄手上着、ということらしい。「裃(あこめ)」はその内着だから、いわゆる着物だろう。しかし装束は言葉だけでは良く分からないのでWeb検索すると、着せ替え人形のサイトに巫女装束のページ www3.coara.or.jp/~tic/doll/miko/miko5.html があって気に入ったので、此処の「童」の姿を切袴も含めて巫女装束と想定する事にする。ただ、巫女装束だと汗衫は白で裃は赤だから、記事に従って此処の六人の女兒の装束については、その赤い着物に薄紫の着物を重ね着させて、上着は薄手の赤地に桜色の透かし生地を重ね着した、くらいにしておく。

右は、*沈の箱に*浅香の下机(ぢんのはこにせんかうのしたづくゑ)、打敷は青地の*高麗の錦(こまのにしき、精緻な織り柄)、脚結びの組(あしゆひのくみ、中敷き布を台の脚に結びつけた組紐)、花足の心ばへなど(けそくのこころばへなど、台の飾り足の細工など)、今めかし(現代風です)。*「沈の箱(ぢんのはこ)」は一つには、高価な香木である沈香を入れる専用箱、とあるが、此処では画軸を入れてある箱。今一つには、沈香で作った箱または沈香を貼り付けた箱、とある。「沈香(ぢんかう)」はクジシキ科の常緑高木。熱帯地方に産する。葉は楕円形。花は白く、香りがある。>とあり、さらにその木の<生木または古木を土中に埋め、腐敗させて製した>香木のことであり<最優品を伽羅(きやら)という。沈水香。じん。>と大辞泉にある。ところで「沈(ぢん)」については、その熱帯木が<高さ約10m。材は芯が固く重く、水に沈む。>と古語辞典にあるので、伽羅まではなりえない黒っぽい沈香木製の箱だと想定しておく。*「浅香(せんかう)」は<水に入れると浮きも沈みもしない香木。水に浮く香木のことも。>と大辞林にあり、大辞泉には<香木の一。沈香(じんかう)の若木で、材質は白く粗いもの。>とある。「下机」は置き台。*「高麗錦」は<高麗から渡来した錦。また、それを模して織った錦。多く紐(ひも)や畳の縁(へり)などに用いた。>と大辞林にある。よく分からないが、浮かし織りの唐錦とは違って目の詰んだ平文様の多色織物だったのだろう。

童、青色に*柳の汗衫(あをいろにやなぎのかざみ)、*山吹襲の裃着たり(やまぶきがさねのあこめきたり)。*「柳」は黄緑。青に黄緑の重ね着は「柳襲(やなぎがさね)」という色合せらしい。*「山吹襲」は黄色に黄土色を重ね着する。左方が赤を基調とするのに対して、右方は青が基調のようだ。

皆(童らが画軸をすべて)、御前に*舁き立つ(おまえにかきたつ、帝の御前に二人掛かりづつで大切に運び並べます)。*「舁く(かく)」は<(二人以上で)物を肩にのせて運ぶ。かつぐ。「駕籠(かご)を一・く>と大辞泉にある。華足に画箱が並べられた描写に女兒の姿が述べられて、それに続く記述なのだから、いよいよ画軸が女兒たちによって帝の御前に並べられたのだろう。画軸は子供には重かったのかも知れないが、担ぐほどなら女房たちが手を出しそうで、二人掛かりづつで如何にも大事そうに運んだ、という書き方なのだろう。

主上の女房(うへのにようぼう、それらを左右の女官たちが)、前後と(まへしりへと、対戦の順番どおりに整理して)、装束き分けたり(さうぞきわけたり、仕分けて揃えました)。

召しありて(帝から御呼びが掛かって)、内大臣、権中納言、参りたまふ(御前に着座なさいます)。その日、*帥宮も(そちのみやも)参りたまへり(参内していらっしゃいました)。いとよしありておはするうちに、絵を好みたまへば(とても教養が高い中でも、特に画が御好きなので)、大臣の、下にすすめたまへるやうやあらむ(光君が気軽にお勧めなさっていたのでしょうか)、ことごとしき召しにはあらで、殿上におはするを(特別に正式な客人としてと言う事もなく昼御座の控えにいらしたのを)、仰せ言ありて御前に参りたまふ(帝の御要請で御前に着座なさいます)。*「帥宮」は光君の弟宮で最も仲の良い異母弟。帝の兄宮でもある。

この判仕うまつりたまふ(師宮はこの絵合せの判定を仰せ付かりなされたのです)。いみじう、げに描き尽くしたる絵どもあり(極めて優れた画ばかりなので)。さらにえ定めやりたまはず(師宮はとても判定が付けられません)。

例の四季の絵も(あの朱雀院が梅壺に賜った年間の季節行事の絵も)、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ(昔の名人たちが印象深い絵柄を選んで)、筆とどこほらず描きながしたるさま(一気に描き上げた出来栄えは)、たとへむかたなしと見るに(見事な勢いだと感じ入るものの)、

紙絵は限りありて(屏風絵などと違って紙絵は小さいので)、山水の豊かなる心映へを(やまみずのゆたかなるころろばへを、大自然の豊かさを)え見せ尽くさぬものなれば(とても表現し切れてはいないものなので)、

ただ筆の飾り(ただ筆先の技巧で)、人の心に作り立てられて(画家の意図に沿って描かれたものだから)、*今のあさはかなるも、昔のあと恥なく(当代の軽い画風の作家も、昔の名手に劣らず)、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて(華やかな絵柄で、思わず面白く見える事においては優れているので)、多くの争ひども(画題ごとに左右から提示された多くの絵の数々は)、今日は方々に興あることも多かり(今日のところは其々に感心するものが多く在りました)。*「今のあさはか」さは、ある意味で普遍の価値観でもある。今現在に現出している事柄には、優劣は判じられるものの客観的な評価は定まっていないから、幾世代に渡って認められた事柄との比較では、一先ずは<軽いもの>として扱わざるを得ない。そのものが、他の何物でもなく、其処に其の様にある事に、同時代を生きる者は否応無く関与しているので、その時代が過ぎなければ客観的評価は得られない。自明である。

朝餉の御障子を開けて(あさがれひのみしゃうじをあけて、台盤所の北面襖を開けて続き間にして)、中宮もおはしませば(朝餉の間で中宮もこの絵合せを御覧になって居らしたので)、深う知ろし召したらむと思ふに(深く絵を御存知で楽しんで御出でだろうと)、大臣もいと優におぼえたまひて(光君は大変結構なことだと御思いになって)、所々の判ども心もとなき折々に(絵柄の所々に意味が分かり難い事が在った場合などに)、時々さし応へたまひけるほど(時々ご意見をさし挟みなさるのを)、あらまほし(実に好ましく御思いです)。

[第三段 左方、勝利をおさめる]

定めかねて夜に入りぬ(勝負の着かないまま夜になりました)。左はなほ数一つある果てに(左は最後の一枚として遂に)、「須磨」の巻出で来たるに、中納言の御心、騒ぎにけり(動揺しました)。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを選び置きたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひすまして静かに描きたまへるは、たとふべきかたなし。

親王よりはじめてまつりて(判者の師宮を初めとし申して、この場の誰しもが)、涙とどめたまはず(涙を止め為されません)。その世に(その不遇当時に)、「心苦し悲し(不都合な事で残念だ)」と思ほししほどよりも(と御思いになった気持ちよりも)、おはしけむありさま(光君の流浪の有様や)、御心に思ししことども(当時の御自身の御気持ちなどが)、ただ今のやうに見え(目下の今の絵の中に示されて)、*所のさま(田舎の様子に寂しさを)、おぼつかなき浦々(海岸線の起伏に先行きの不安を)、磯の隠れなく(海の照り返しに潔白を)描きあらはしたまへり(描き出して御出ででした)。*「須磨」巻にはく人びとの語り聞こえし(伝え聞いた須磨の)海山のありさまを、遥かに思しやりしを(京に居た時は遠く思い描いていらしたが)、御目に近くては(実際に御覧になって)、げに及ばぬ磯のたたずまひ(話以上の磯の風景を)、二なく描き集めたまへり(今まで無かった画風で何枚も描きなさいました)。>と記述されていた。五年前の三月末に光君は須磨へ退去し、夏の長雨を過ごす内に京の体制も落ち着いて、閑所での暮らしが固定化しつつある孤立感を深めていた秋口の描写である。

草の手に仮名の所々に書きまぜて(草書体の平仮名で絵柄の所々に詞書が添えられていて)、まほの詳しき日記にはあらず(漢文による正確な日記ではないが)、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし(情感ある歌なども添えられていて、当時の光君の思いが偲べれます)。

誰も*こと事思ほさず(たれもことごとおもほさず、この座の誰もがもはや他の事を御考えにならず)、さまざまの御絵の興(さまざまの御絵への興味も)、これに皆移り果てて、*あはれにおもしろし(情緒深く)。*「ことごと」については、注には<『完訳』は「誰も誰ももう他のことは念頭になく」と注す。>とある。その通りの文意だろう。だから漢字を充てるなら、「異々」か「異事」。また、「誰も事」「異思ほさず」かもしれない。*いくら出来の良い絵であっても、流浪時の画を公衆の面前で自らが披露する神経は私には理解しにくい。第一、朱雀院や大后側に対する正面切つての当て付けではないか。権力者ならより慎むべきと思うのは、評論家ぶり過ぎた見方だろうか。しかし内大臣の自筆と在れば、勝利は見え透いていて、光君の画才の修辞にすらなっていない、と私は感じる。いっそ下手くそで笑いものになったくらいの方が、例えば夫人に嫌味を言われた行のように、今めいた「源氏物語」の筆致に相当している気がする。斯くして、次のように一挙に古い物語に戻ったかのような語り口とは、相成る。

よろづ皆おしゆづりて、左、勝つになりぬ。